第二ペトロ書の偽作意図とストラテジー

辻　　学

序　問題の所在

Ⅱペトロ書が，ペトロの名前を使いながら実際にはユダ書に依存した偽書であることは，研究者間でほぼ合意に達している認識である[1]。

しかしながら，あまり問題にされないのは，なぜⅡペトロ書の著者がそのような，ユダ書を下敷きにした偽作ペトロ書簡なるものを著そうとしたのかということである。著者の意図はどこにあったのだろうか。

もう一つの問題は，手法に関するものである。Ⅱペトロ書の著者は，自分の作品が本当にペトロが記したものであると読者に思わせると同時に，ユダ書を下敷きにしていることが露呈しないための工夫をする必要があったはずである。その課題を著者はどのようにして果たしているのだろうか。

本稿ではこの二つの問いを，Ⅰペトロ書およびユダ書とⅡペトロ書がどのような関係になっているかを検証することによって明らかにしていきたい。

1　Ⅰペトロ書との関係

Ⅱペトロ書の著者が「ペトロ」の名前を利用した動機は，文書の権威を高めることで，広く読まれ，その内容が尊重されることにあったはずである[2]。

「ペトロ」の手紙を装うために著者はいろいろと工夫をしている。山上におけるイエスの変貌伝承（マルコ9：2－13並行）を用いているのもその一つである（1：16－18）[3]。しかしながら，偽書としてのⅡペトロ書にとって最も重要だっ

たのは，Ⅰペトロ書との関連づけだったに違いない。

Ⅱペトロ書の著者は，Ⅰペトロ書を知っており，同じ著者による手紙であるという印象を与えようとしている。それは，手紙の書き出しを比較してみるとよくわかる。

Ⅰペトロ1：1－2

Πέτρος ἀπόστολος Ἰησοῦ Χριστοῦ [...], χάρις ὑμῖν καὶ εἰρήνη πληθυνθείη.

Ⅱペトロ1：1－2

Συμεὼν Πέτρος δοῦλος καὶ ἀπόστολος Ἰησοῦ Χριστοῦ [...], χάρις ὑμῖν καὶ εἰρήνη πληθυνθείη ἐν ἐπιγνώσει τοῦ θεοῦ καὶ Ἰησοῦ τοῦ κυρίου ἡμῶν.

(ユダ1－2)

Ἰούδας Ἰησοῦ Χριστοῦ δοῦλος, ἀδελφὸς δὲ Ἰακώβου [...], ἔλεος ὑμῖν καὶ εἰρήνη καὶ ἀγάπη πληθυνθείη.

下線を付した部分が，Ⅰペトロ書と逐語的に一致している。発信人名に「シメオン」を加えたのは，手紙全体に擬古的雰囲気を与え，いかにもペトロ自身が書いたように思わせるための工夫に違いない[1]。δοῦλοςは，直接にはユダ書の影響と思われるが，「キリストの僕」は，パウロがよく用いている自称なので（ローマ1：1; ガラテヤ1：10; フィリピ1：1。ヤコブ1：1も参照），パウロ書簡を知っていた著者（3：15－16）がそれを取り入れたとも考えられる（著者が想定する読者も当然パウロ書簡を知っていたはずである）。ἐπίγνωσις はⅡペトロ書のキーワードの一つ（1：2, 3, 8; 2：20）なので，手紙全体を規定するものとして冒頭に配置されたのであろう。それらの点を除けば，Ⅱペトロ1：1－2はⅠペトロ1：1－2に似せて作文されている。

手紙の書き出しがⅠペトロ書を意識していることは十分見て取れる。しかし，そうすると不思議なのは，手紙全体を通して同じ努力がなされてはいないことである。一見して明らかにⅠペトロ書を意識しているとわかる箇所は極めて少ない[5]。著者は，自分の文書を全体としてⅠペトロ書に似せようとしたり，まして

や内容上の一致を図ろうとする意図は持っていないようである。

ところで，Ⅰペトロ書を指し示していると一般に見なされているⅡペトロ3:1-2には，気になる点がある。ここで前提されている「最初の手紙」と，この「二度目の手紙」＝Ⅱペトロ書とは同じ読者を想定しているはずなのに，手紙の宛先がⅠペトロ書とⅡペトロ書とでは異なっているのである。Ⅰペトロ書は，宛先教会の地域を具体的に列挙しているが，Ⅱペトロ書の受取人は特定されていない(1：1「私たちの神と救い主イエス・キリストの義の内にある，私たちと同じ尊い信仰を受けた人々へ」)[6]。

特定の教会や地域に宛てるのではなく，包括的な宛先を用いる手法は，ヤコブ書やユダ書にも見られるが[7]，これは，偽書の技法の一つと見なすことができる。ペトロの死後かなり長い期間を経た後に，具体的な宛先を記した書簡が出てきたら，そのような書簡をこれまで宛先地域の教会が全く知らなかったということが極めて不自然になる。したがって，Ⅰペトロ書と同じ宛先を用いることは，真筆性が疑われる危険を生じさせることになるので避けられたに違いない[8]。「最初の手紙」はⅠペトロ書とも理解できるし，また別の（現存しない）手紙を指しているとも解釈できる。Ⅱペトロ書3：1－2がⅠペトロ書を指示しているかどうかは，意図的に曖昧なまま置かれているのである[9]。

以上の考察が正しければ，著者の関心は，Ⅰペトロ書の内容との連続性にはなかったことになる。Ⅱペトロ書の著者が必要としていたのは，ペトロの権威なのであり，「ペトロが書いた手紙」として認知されることこそが重要だった[10]。したがって，Ⅰペトロ書と矛盾するようなことになって，真筆性を疑われてはならないが，Ⅰペトロ書の内容に踏み込む必要はなかったのである。

2．ユダ書との関係

Ⅱペトロ書がユダ書に文献依存していることは間違いない。依存が見て取れる箇所は次の通りである[11]。

ユダ2/Ⅱペトロ1：2	ユダ10/Ⅱペトロ2：12
ユダ4/Ⅱペトロ2：1－3	ユダ11/Ⅱペトロ2：15
ユダ5a/Ⅱペトロ1：12	ユダ12/Ⅱペトロ2：13
ユダ6/Ⅱペトロ2：4	ユダ12f/Ⅱペトロ2：17
ユダ7/Ⅱペトロ2：6, 10a	ユダ16/Ⅱペトロ2：18
ユダ8/Ⅱペトロ2：10b	ユダ17/Ⅱペトロ3：2
ユダ9/Ⅱペトロ2：11	ユダ18/Ⅱペトロ3：3

ユダ書を下敷きに使った箇所はほとんど2章に集中していることがわかる。ここは，教会内に現れる異端的人物（ユダ18/Ⅱペトロ3：3「嘲る者たち」）に対する罰がすでに旧約によって例証されていること，その者たちの登場が終末到来のしるしであることを示す部分であり，これこそが，Ⅱペトロ書の著者がユダ書から拝借したかった主題であった。

ただし，Ⅱペトロ書の著者がユダ書を利用するやり方には次のような特徴がある。

（1）ユダ書の文章をそのまま引用している箇所はほとんどない。むしろ「自由なパラフレーズ」[12] とでも言うような用い方をしている。やや例外的なのはユダ12－13/Ⅱペトロ2：17とユダ17－18/Ⅱペトロ3：2－3だが，以下に示すように，前者の場合は，最初と最後の数語が一致するだけだし，後者の場合は不一致も多い。

ユダ12－13　Οὗτοί εἰσιν [...], οἷς ὁ ζόφος τοῦ σκότους εἰς αἰῶνα τετήρηται

Ⅱペトロ2：17　οὗτοί εἰσιν [...], οἷς ὁ ζόφος τοῦ σκότους τετήρηται.

ユダ17－18　ὑμεῖς δέ, ἀγαπητοί, <u>μνήσθητε τῶν ῥημάτων τῶν προειρημένων ὑπὸ τῶν ἀποστόλων τοῦ κυρίου</u> ἡμῶν Ἰησοῦ Χριστοῦ 18　ὅτι ἔλεγον ὑμῖν [ὅτι] <u>ἐπ' ἐσχάτου</u> [του] χρόνου ἔσονται <u>ἐμπαῖκται κατὰ τὰς</u> ἑαυτῶν <u>ἐπιθυμίας πορευόμενοι</u> τῶν ἀσεβειῶν.

Ⅱペトロ3：2－3　<u>μνησθῆναι τῶν προειρημένων ῥημάτων ὑπὸ</u> τῶν ἁγίων προφητῶν καὶ τῆς <u>τῶν ἀποστόλων</u> ὑμῶν ἐντολῆς <u>τοῦ κυρίου</u> καὶ σωτῆρος, 3　τοῦτο πρῶτον

γινώσκοντες ὅτι ἐλεύσονται ἐπ' ἐσχάτων τῶν ἡμερῶν [ἐν] ἐμπαιγμονῇ ἐμπαῖκται κατὰ τὰς ἰδίας ἐπιθυμίας αὐτῶν πορευόμενοι

Ⅱペトロ書の著者が露骨な引用をしなかったのは，ユダ書に依存していることがはっきりわかると，真筆性が疑われてしまうからであろう。ユダ書をすでに知っている読者は，ユダ書からの露骨な引用が連発されていれば当然疑いを抱いてしまう。Ⅱペトロ書のほうが後から流布するのだから，ユダ書を真似たということが露呈する危険は高かったはずである。

しかしながら，露骨な引用を避けたとしても，両者がよく似ているという印象は当然避けられない。それゆえ，ユダ書の方がⅡペトロ書に拠っているという印象を与えることが必要となる。このために，続く（2）の操作がなされたと考えられる。

（2）ユダ書においては，読者が現在直面しているグループへの批判として描かれていることが，Ⅱペトロ書では，未来の事柄に書き換えられている場合がある。ユダ4/Ⅱペトロ2：1およびユダ10/Ⅱペトロ2：12にその例が見られる。

ユダ4「ある人々が紛れ込んだ」(παρεισέδυσαν γάρ τινες ἄνθρωποι)
Ⅱペトロ2：1「そのように君たちの中にも偽教師が現れるだろう，この者たちは滅びの誤った教えを持ち込むだろう」(ὡς καὶ ἐν ὑμῖν ἔσονται ψευδοδιδάσκαλοι, οἵτινες παρεισάξουσιν αἱρέσεις ἀπωλείας)

ユダ10「この者たちは，自分たちが知らないことを何でも冒瀆し，理性なき動物のように，本性で知っている事柄によって滅ぼされるのである[現在]」(οὗτοι δὲ ὅσα μὲν οὐκ οἴδασιν βλασφημοῦσιν, ὅσα δὲ φυσικῶς ὡς τὰ ἄλογα ζῷα ἐπίστανται, ἐν τούτοις φθείρονται)
Ⅱペトロ2：12「この者たちは，単なる非理性的な動物のように，[...] 自分たちが知らないことによって冒瀆しているのであり，それらが滅ぼされる時に彼らもまた滅ぼされるであろう[未来]」(οὗτοι δὲ ὡς ἄλογα ζῷα [...] ἐν οἷς ἀγνοοῦσιν

βλασφημοῦντες, ἐν τῇ φθορᾷ αὐτῶν καὶ φθαρήσονται)

また，同種の書き換えとして，過去の事柄を現在の事柄に移している例も見られる[13]。

ユダ17「私たちの主イエス・キリストの使徒たちによって前もって語られた(προειρημένων) 言葉を思い出しなさい」
Ⅱペトロ3:2「聖なる預言者たちによって前もって語られた言葉と，あなたがたの使徒たちの[伝えている]主であり救い主[なる方]の掟を思い出すように」(μνησθῆναι τῶν προειρημένων ῥημάτων ὑπὸ τῶν ἁγίων προφητῶν καὶ τῆς τῶν ἀποστόλων ὑμῶν ἐντολῆς τοῦ κυρίου καὶ σωτῆρος)

ユダ書が「使徒たち」を過去の存在として描いているのに対し，Ⅱペトロ書では，使徒たちの（伝えている）掟は，預言者たちの過去（1：19－21参照）とは時間的に区別された，現在の事柄である。「あなたがたの使徒たち」という言い方は，「使徒たち」が著者（＝使徒ペトロ）と同時代の存在であるという印象を強めている。

これらの改変に共通している意図は，第1世代である使徒ペトロが書いたとしたら時間的におかしいと思われる記述を修正することにある[14]。ユダ書では現在の問題として描かれていること（異なる教えの出現）を，将来起こる問題としてペトロが予言するというスタイルを採ることで，ユダ書よりもⅡペトロ書のほうが時間的に先に書かれたという印象を与えることができるし，このスタイルは何よりも，ペトロの「遺訓」（1：13参照）という類型にふさわしい[15]。

（3） Ⅱペトロ書が示す第三の特徴は，ユダ書に見られる旧約正典外文書への言及・示唆を削除・改変していることである。

ユダ書は9節で，大天使ミカエルがモーセの遺体をめぐって悪魔と議論したと述べている。旧約正典には見られないこの逸話は，『モーセの遺訓』の（失われ

た）結尾部分を引用したものと見られるが[16]，Ⅱペトロ2：11では「ミカエル」が「天使たち」に変えられているほか，モーセの遺体に関する論争という文脈が削除されている。

また，ユダ14－15は，エチオピア語エノク1：9の引用だが[17]，これもⅡペトロ書では削除されている。

ユダ11では，「カインの道」「バラムの迷い」「コラの反逆」といった比喩的表現が用いられているが，これらはいずれも，正典外のユダヤ教伝承を踏まえて初めて理解できる表現である[18]。Ⅱペトロ2：15－16では「ボソルの子バラムの道」（民数記22：32参照）のみ採用され，民数記22章の物語に沿った説明が加えられている。

ではなぜこのような改変を，Ⅱペトロ書の著者は行なったのだろうか。動機としては，次のような事柄が考えられる。

①　まず考えられるのは，正典外文書をユダ書が引用していることへの非難があったので，同じ非難を受けないため，あるいは著者自身も同じ批判をユダ書に対して感じていたために書き換えたということである。ヒエロニムスによればユダ書は，エノク書からの引用のゆえに大多数の人々から退けられていたという（『著名人列伝』4）。また盲人ディデュモスは，大天使（ミカエル）がモーセの身体のことで悪魔に語っている箇所（ユダ9）のゆえに，ユダ書と『モーセの昇天』に異議が唱えられていると述べている（『ユダ書注解』9 [PG 39, 1815A]）。

この推測には傍証がある。オリゲネスによればⅡテモテ書も，3：8における『ヤンネとヤンブレの書』からの引用のゆえに同種の非難を受けていたという（『マタイ注解』117）[19]。また，テルトゥリアヌスによるとエノク書は，ユダヤ教徒が正典に含めなかったゆえにキリスト教徒の一部からも拒絶されたという。エノク書は，ノアの洪水以前に書かれた文書が（洪水を免れて）残っているはずがないという理由でその真筆性に疑義が持たれていた（とテルトゥリアヌスは推測している。『婦人の服装』I.3.1 [SC 173]）。

ただし，ヒエロニムスもディデュモスも4世紀の人であって，2世紀前半にすでにこの種のユダ書批判が存在していたことを裏づける文献はない（テルトゥリ

アヌスも2世紀後半～3世紀前半)。

反証となるのはさらに，著者自身が，正典文書の内容を超えたハガダー的伝承素材を用いていることである（例，2：5，7－8)。したがって，正典外文書の使用自体に著者が抵抗を覚えたとは考えにくい。

② よく主張されるのは，これらの正典外文書をⅡペトロ書の著者自身，あるいは（著者が想定している）読者が知らないために書き換えられたという可能性である[20]。

この推測の傍証となるのはまず，『モーセの遺訓』に関する証言が初期キリスト教の中で極めて少ないことである。ここから，『モーセの遺訓』はあまり流布していなかったと推測することができる。

さらにまた，Ⅱペトロ書の「論敵」また「宛先」としてしばしば異教（＝非ユダヤ教）世界出身のキリスト教徒が想定されていることも，この推測を支える材料とされる[21]。「論敵」が未来的終末論に対する懐疑を示していることは，そのような背景からしばしば説明されている（3：3以下)。

しかしながら，Ⅱペトロ書の著者がこれらの初期ユダヤ教文書を知らなかったということは考えにくい。著者は，ユダヤ教伝承を良く知っている人物である。3：7に見られる，終末時に世界全体が火で滅ぼされるという表象や，3：12における「神の日……が来るのを早める」という考え方などは，初期ユダヤ教伝承に立脚しており[22]，そのような伝承を知っている著者が，正典外のユダヤ教文書に無知だったとは思われない。

また，読者ないし論敵について言えば，これらの書き換えをしたところで，ユダヤ教伝承を知らない読者の理解を助ける効果や，そのような論敵への説得力を増す効果はあまり期待できないであろう。とりわけ論争に際しては，相手の知らない情報を持ち出すことは戦略的に有効ではあっても，妨げになるものではないはずである。また，もしそのような配慮が働いていたのだとしたら，正典外ユダヤ教伝承に属する，「8番目」としてのノア（2：5）や義人ロトの例（2：7－8）を逆に書き加えている理由がわからなくなる。したがってこの可能性もあまり考えられない。

③　私見では，ユダ書との露骨な類似を避ける意図による改変である蓋然性が最も高い。すなわち，上記（1）と同じで，あまりに一致が多いと真筆性を疑われてしまうので，ユダ書に特徴的な，正典外文書への言及を削り，記述の簡略化を図ったと考えれば一番無理がない。ハガダー的伝承素材や正典外ユダヤ教伝承を時折持ち込んでいるのも，ユダ書との相違を印象づけるためだとすればよく理解できる。もちろんこれは，読者がすでにユダ書を知っている可能性を計算しての改変である。

このようにⅡペトロ書では，ユダ書の内容に依存しながらも，ユダ書を利用して書かれた偽書であることが露呈しないような工夫が凝らされている。著者は，ユダ書を知っている読者に対して，むしろユダ書の方がⅡペトロ書に依存しているかのような印象を与えようとしているのである。

結　　論

（1）　Ⅱペトロ書の文献依存は，一言でまとめると，「権威はⅠペトロ，中身はユダ」というやり方である。すなわち：

（2）　Ⅱペトロ書の著者は，Ⅰペトロ書を知っており，同じ著者による手紙という印象を読者に与えようとしている。つまり，Ⅰペトロ書（そして使徒ペトロ）の権威を利用しようとしているのである。ただし，Ⅰペトロ書の内容にはほとんど依存しておらず，扱う主題も大きく異なっている。Ⅱペトロ書の著者は，真筆性を装うための道具としてⅠペトロ書を用いたのであり，Ⅰペトロ書の内容にはほとんど関心を示していない（したがって，Ⅱペトロ書の著者とⅠペトロ書の著者の歴史的［例えば，同じ「ペトロ・サークル」に属するといったような］関係はほとんど問題にならない[23]。）

（3）　他方ユダ書には内容的に大幅な依存をしている。Ⅱペトロ書の著者は，終末を否定する「嘲る者たち」が現れることこそが終末到来のしるしだというメッセージをユダ書から読み取り，自分の文書に取り入れた。ただし，ユダ書に依存していることが露呈して真筆性が疑われることにならないよう，ユダ書からの

逐語的な引用は避け，むしろ時間的に先行するⅡペトロ書にユダ書が依存しているかのような印象を作り出そうとしている。

［注］

（本稿は，2005年9月15－16日に同志社大学で開かれた日本新約学会第45回大会における同タイトルの研究発表に基づいている。）

（1） 論拠については，R. J. Bauckham, *Jude, 2 Peter*（WBC 50), Waco, TX 1983, 131-162および小林稔「ペトロの手紙二」，大貫隆・山内眞監修『新版総説新約聖書』日本キリスト教団出版局，2003年，386－388頁参照。近年の学術的注解書で，Ⅱペトロ書の真筆性を擁護しているものは見当たらない。また，Ⅱペトロ書がユダ書に依存していることも疑う余地がない。Th. J. Kraus, *Sprache, Stil und historischer Ort des zweiten Petrusbriefes*（WUNT 2/136), Tübingen 2001, 368-376; L. Thurén, The Relationship between 2 Peter and Jude: A Classical Problem Resolved?, in: J. Schlosser (ed.), *The Catholic Epistles and the Tradition*（BEThL 176), Leuven 2004, 451-460などを参照。

（2） W. Speyer, *Die literarische Fälschung im heidnischen und christlichen Altertum*（HAW I.2), München 1971, 286.

（3） ただし，Ⅱペトロ書の著者はいずれかの福音書に文献依存しているのではなく，独立した伝承を利用しているというのが大半の研究者の見方である。Bauckham, *Jude, 2 Peter*（注1）205-210参照。

（4） 新約の中でペトロが「シメオン」と呼ばれているのは，他に使徒15:14（使徒会議で主の兄弟ヤコブが用いている）だけである。Bauckham, *Jude, 2 Peter*（注1）166-167は，真筆性を装うための工夫なら，Ⅰペトロ書の書き方に倣ったはずだというのだが，後発の偽書ほど念入りに装うのが普通である（牧会書簡！）。

（5） G. H. Boobyer, The Indebtedness of 2 Peter to 1 Peter, in: A. J. B. Higgins (ed.), *New Testament Essays*（FS T. W. Manson), Manchester 1959, 34-53は，Ⅰペトロ書の影響が認められる箇所を列挙しているが，せいぜい，Ⅱペトロ書の著者がⅠペトロ書を知っていたことが見て取れる程度である。両書簡を同一の著者に帰することができるほどの一致は――Bauckham, *Jude, 2 Peter*（注1）145が正しく指摘している通り――見られない。T. Fornberg, *An Early Church in a Pluralistic Society*（CB. NT 9), Lund 1977, 12-15も，導入部以外に両書簡の結びつきを見て取るのは難しいとしている。

（6） U. Schnelle, *Einleitung in das Neue Testament*（UTB 1830), Göttingen [4]2002, 472は，3:1-2を根拠にして，Ⅱペトロ書もⅠペトロ書と同じ宛先に向けられている

と推測するが，考え方が逆で，なぜ意図的に異なった宛先をⅡペトロ書が挙げているかを問うべきである。

（7） おそらくエフェソ書も同じ（永田竹司「エフェソの信徒への手紙」，『新版総説新約聖書』（注1）303—314頁：306—307頁参照）。新約外典では「使徒たちの手紙」（『聖書外典偽典』別巻・補遺Ⅱ，教文館，1982年，41—82頁）も「全世界の人々」に宛てられている。

（8） Ⅱペトロ書の著者はおそらく，Ⅰペトロ書を真正の書簡と考えていたはずである。少なくとも，Ⅰペトロ書は真正書簡として受容されているという事実から出発しなければならなかったであろう。

（9） 3：1—2が暗示しているのはⅠペトロ書であるという結論が近年は支配的だが（Bauckham, *Jude, 2 Peter*.［注1］285-286参照），C. Bigg, *The Epistles of St. Peter and Jude* (ICC), Edinburgh ²1902, 289が，両書簡の主題上の不一致を理由に，「Ⅰペトロ書に言及しているというのが絶対に確かだとは言えない」と漏らしているのは誠実な解釈だと思われる。この印象を与えることこそがまさに，Ⅱペトロ書の著者が意図するところだったのではないだろうか。Boobyer, Indebtness（注5）34-38が主張しているように，預言という主題はⅠペトロ1：10—12にも見られるゆえに，3：1—2にⅠペトロ書への暗示を見て取ることは十分可能である。しかし他方，「あなたがたの使徒たちの（伝えた），主にして救い主なる方の戒め」（3：2）に対応するものをⅠペトロ書に見出すのは困難だし，いずれにしても表現の曖昧さは否定できない。

（10） 著者がペトロの偽名を用いた理由ははっきりしないが，終末の来臨を否定する論敵に対する反証として，来臨の先取りと解釈されていた山上の変貌の出来事を示すにあたって，その目撃証人であるペトロが著者として選ばれたのではないかという，I. Broer, *Einleitung in das Neue Testament*, Bd. II (NEB Erg. 2/II), Würzburg 2001, 647-648の推測は，神学的動機としては十分あり得よう。また，パウロ書簡の内容（おそらく終末論）をめぐる誤解（Ⅱペトロ3：15—17参照）を正しうる権威者としてはペトロが最適だったということもおそらくあるだろう。さらに，偽書という観点から言えば，初期キリスト教においてユダよりも権威も知名度も高く，かつその思想内容や生涯を示す文献がほとんど残っていないペトロは，偽名文書の格好の対象となり得たと思われる。

（11） Schnelle, *Einleitung*（注6）473-474による。Fornberg, *Church*（注5）33-59参照。

（12） T. Callan, Use of the Letter of Jude by the Second Letter of Peter, *Bib*. 85 (2004) 42-64: 43.

（13） Callan, Use（注12）61参照。

（14） ただしこの操作は徹底されていない。ユダ11が論敵の行為をアオリストで描い

ている（カインの道を行った，バラムの迷いに流された，コラの反抗によって滅んだ）のをⅡペトロ2：15はそのままにしている（まっすぐな道を離れて迷った）。2：18—22でも論敵の現在の行為や状態が指摘されており，将来起こることの予言というスタイルが一貫していない（小林稔「ペトロの第二の手紙」，上智大学キリスト教文化・東洋宗教研究所編『思いがけない言葉』リトン，2004年，113—145頁：130頁も同様の指摘をしている）。

(15) D. F. Watson, The Oral-Scribal and Cultural Intertexture of Apocalyptic Discourse in Jude and 2 Peter, in: idem (ed.), *The Intertexture of Apocalyptic Discourse in the New Testament* (SBL SyS 14), Atlanta, GA 2002, 187-213: 201. Ⅱテモテ3：1—9; 4：3—4; さらに使徒20：29—30参照。

(16) Bauckham, *Jude, 2 Peter*（注1）190.「モーセの遺訓」について詳しくは，Bauckham, ibid. 65-76;「モーセの遺訓，モーセの昇天ギリシア語断片」（土岐健治），『聖書外典偽典』別巻・補遺Ⅰ，教文館，²1985年，151-188頁参照。

(17) ユダ書の著者が，エノク書のギリシャ語版を用いたのか，あるいはアラム語版から自分で訳したのかという問題については，A. Vögtle, *Der Judasbrief/Der 2. Petrusbrief* (EKK XXII), Solothurn u. Düsseldorf/ Neukirchen-Vluyn 1994, 71-77; Bauckham, *Jude, 2 Peter*（注1）94-96参照。フェクトレは，ギリシャ語写本をユダ書の著者が知っていたと見る。ボーカムによれば，著者はギリシャ語版も知っていたが，アラム語版から独自に翻訳したとする説明がもっともわかりやすいという。

(18) カインを異端の始まりとする見方は1世紀のユダヤ教に存在した。ヨセフス『古代史』1.60—62; ベニヤミン遺訓7：3—5; タルグム・ネオフィティⅠ，断片タルグム，偽ヨナタンのいずれも創世記4：8（G. Vermes, The Targumic Versions of Genesis 4:3-16, in: idem, *Post-Biblical Jewish Studies* [SJLA 8], Leiden 1975, 92-126: 115-116）参照。「バラムの迷い」はおそらく，バラクに対する彼の助言がイスラエルを罪へと誘う結果になったことを指しており（民数記31：16参照），初期ユダヤ教においてバラムは，イスラエルを堕落させた悪人として描かれている（偽フィロン『聖書古代誌』18：13; タルグム・偽ヨナタン・民数記24：14, 25; 31：8参照）。タルグムにおいて，コラとダタンおよびアビラムは（指導者モーセに反抗して）「分裂」をもたらす存在と性格づけられており（ネオフィティⅠ・民数記16：1; 26：9; 偽ヨナタン26：9），この性格づけが初期キリスト教文書においても継承されている（コラの反逆を暗に指し示しているⅠクレメンス51：1—4およびⅡテモテ2：19参照）。

(19) H. Frhr. von Campenhausen, *Die Entstehung der christlichen Bibel* (BHTh 39), Tübingen 1968, 272および同頁注131参照。

(20) Bauckham, *Jude, 2 Peter*（注1）139-140; Fornberg, *Early Church*（注5）58など。Kraus, *Sprache*（注1）374 Anm. 23も参照。

(21) K. Berger, Streit um Gottes Vorsehung. Zur Position der Gegner im 2. Petrusbrief, in: J. W. Van Henten (ed.), *Tradition and Re-Interpretation in Jewish and Early Christian Literature* (FS J. Lebram), Leiden 1986, 121-135: 131-132; さらにVögtle, *Jud/2Petr* (注17) 127; Bauckham, *Jude, 2 Peter* (注1) 154-157なども参照。Fornberg, *Early Church* (注5) 127-128は，周辺の（異教）世界における考え方に馴染んだ，神学的意識の高くないキリスト教徒たちが「相手」となっていると見る。

(22) Vögtle, *Jud/ 2Petr* (注17) 227 (ad 3:7); H. Paulsen, Der *Zweite Petrusbrief und der Judasbrief* (KEK XII/2), Göttingen 1992, 162-163.170; Bauckham, *Jude, 2 Peter* (注1) 300.325参照。

(23) Bauckham, *Jude, 2 Peter* (注1) 167は，Ⅱペトロ1:1の「シメオン」という表記を手がかりにしてそのような推測をしているが，賛成できない。ボーカムによれば，著者はローマにおける「ペトロ・サークル」の一員で，このサークルには，パレスチナでペトロを知っていたマルコやシルワノがいたため，パレスチナで用いられていた「シメオン」という呼称がローマの「ペトロ・サークル」でも用いられ続けたというのである。